

ONE LOVE

通信

63号

2018年6月10日発行

やっぱり人生、良いことと悪いことが交互にやってくる。2017年から現在にかけて、それを実感したのでした。そしてそれは死ぬまで繰り返していくんだろうなあって思う。めげそうなとき、たくさんの人に支えてもらった。励ましてくれる人、愚痴を聞いてくれる人、まだまだ甘いとさらに突っ込んでくる人。その支え方は人それぞれだけど、改めて言う。「みんな、ありがと〜！みんなのおかげで生きていけるぞ〜！」

そして私たち、新たな挑戦に向かって邁進するのだ。いっしょに、楽しみに待っていておくれ。



【2020年は目の前だ！】

さて皆さん、ご報告があります。

ガテラ専用の競技用車いすレーサーが手に入りそうです！

この数年、2020年の東京パラリンピックに出たいと言い続け、競技用の車いすを探し続け、やっと車いすマラソンをやっている人から寄付していただいたものの、ガテラの障害には適合しなかったため、何とか資金を集めて購入できないかと作戦を練っておりましたが、ありがたいものです。有志の皆さまが資金を出し合ってくださいました。

そして桜の季節、胸を躍らせながら車いすの採寸のため千葉にある、日本で数少ない競技用車いすを作る会社を訪ねました。

そこは千葉と言ってもかなり奥の方。2017年の帰国の際に一度訪ねたのですが、駅からタクシーを利用。どんな人里から離れていくので（大げさに聞こえるかもしれないが、本当にそう感じたのです）、果たしてこんなところにあるのだろうか？と不安になってしまったのであります。

さて今回、採寸のための訪問です。人それぞれ体格が違います。障害の程度も違います。以前譲ってもらった競技用車いすは、両足を切断された方が使っていたもの。だから足のあるガテラはうまく乗ることができません。その足の置き場所がないからです。

採寸当日は担当の方二人がかりで相談に乗ってくれました。譲っていただいた車いすに乗った時の状況を伝え、練習をする時にどうにも足の置き場がなく、つま先を引きずってしまうこと、車いすの競技をするのは初めてなので、アドバイスをもらわないことには、私たちだけでは判断ができかねることなど、3時間以上にもわたって検討してくれました。

いくつかのサンプルが置いてあり、それぞれ少しずつ仕様が変わります。まずはこっちに乗って足の具合を見て、今度はあっちに乗ってお尻のはまり具合を見て…。

そしてここですべての人がはっきりと確認した事がありました。それはガテラの「足が長い」ということです。どのサンプルに試乗しても、とにかく足がみょ〜んと置き



場所を失ったように突き出てしまうのですね。いや〜、やはり日本人は足が短いのです。まざまざと見せつけられたような感じです。これは義足にも言えることでした。日本でいらなくなった中古の義足を集め、ルワンダに持っていった時、まず言われた一言。「これは子供の義足？」いえいえ、違います。れっきとした大人の義足です。でも彼らの足と比べてみると、太腿の半分あたりまでしか長さがありませんね…。それを見た私、実に情けなかった。

車いす競技をする人は、両足切断の人または両足の感覚がなく、そのまま正座をした状態で椅子の部分に足を収められる人が多いそうです。ガテラの場合、足の感覚はしっかりあるので、椅子の中に収めることができません。だからその足の置き場所が重要なのですね。

ああでもない、こうでもないと言々言々やりながら、結局本人もやったことがないからどうするのが一番良いのかわからない。そのくせ主張を激しくする。あそこが痛いとか、この体勢はしんどいとか…。その都度通訳をしなくては行けない私。それと同時にプロフェッショナルである製作会社の人の意見も尊重しなくては行けない…。



レーサーの採寸中。
二人がかりで3時間もかかって採寸してくれました。
さて、どんなのができるかな？楽しみなのだ。

で、ここで私とガテラの会話がだんだん険悪になってくるのですね。人の意見を聞かず主張を繰り返すガテラと、製作のプロの間に立つ私。この通訳という役割は、どんな場面においても悩まされます。

私としてもお互いの主張や意見を尊重したい。が、両方から言われると、仕舞いには通訳すること自体が嫌になってくるのです。いっそのこと私自身の主張を前面に出してやろうか？と思っちゃうのです。そんなことを考えると、通訳という仕事は大変だなあと思うのです。だってそうでしょ。人の言ったことをそのまま訳さなくちゃいけない。自分がどんなに「違う！」と思っても、それを押し殺して訳さなくちゃいけない。これは私のようなわがままな性格の人間にはつらいですよ。

とまあ、そんなやり取りがあったのち、何とか採寸も終了。あとは製図と見積もりを待つのみです。

しかし！2020年の東京パラリンピックを前に、その会社には注文が殺到しているとか。だから製作には時間を要するとのこと。今年いっぱいかかってしまうかもしれない。う〜ん、なかなかじゃらすではないか。しかしその間、ガテラにはトレーニングに励んでもらうだけだ。私はトレーナーとして、サポートしていこう。ついでにダイエットでもして、私も身軽になろう！

というわけで、皆さま、ついにパラリンピックに向けて本格的に動き出すことができそうです。しかしながらパラリンピックへのハードルは決して低くありません。出場す

るためにはいくつもの条件をクリアしていかななくてはなりません。果たして車いす競技の全く普及していないルワンダでそれらのハードルをクリアできるのか、また年齢的にもかなりになるガテラが世界を目標にどこまで近づくことができるのか？でも皆さまの前で疾走できるように、ワンラブのスタッフで力を合わせてがんばりたいと思います。皆さまが今までずっと支援してくれたルワンダの障害者。言ってみればガテラもその一人。彼の疾走する姿をどうぞ、ルワンダの国旗を振りながら応援してください。

そんな日を夢見て、今日もガテラはバーベルを持ち上げるのであります。が、やるとなったらとことんやる、加減を知らないガテラであるからにして、やりすぎに注意なのだ。

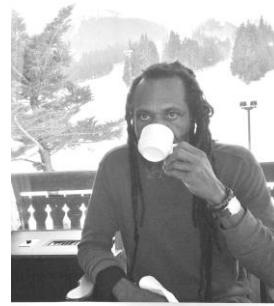
【アフリカ大陸初のチェアスキープレイヤー誕生】

今回の日本滞在、また寒い時期でした。もう少し動きやすい暖かい季節に来たいと思いつつ、2年連続で冬でした。

ならば冬を楽しもうと、誘っていただいたのがチェアスキー。これは椅子の下にスキーの板がついていて、アウトリガーと呼ばれるストックの下に短いスキー板がついたものを使いながら滑る競技であります。

冬のスポーツなど、もちろんガテラはやったことがない。私もバブルの時代を生き、スキーが大流行りだった状況を目の当たりにしながらも、一度もやったことがない。いや、そもそも雪が大量にある光景を目にしたこともほとんどない。そんな状況で果たしてスキーなどできるのか？と思ったが、やってみるものですね。

まずは誘ってくださった人のご自宅に行き、ガテラの体格にあったチェアスキーを探す。ここでも問題になったのは、やはり足の長さ。どうしても長い脚がみょ〜んと突き出てしまう。当日までにそれを何とか調整してもらう事となる。そしてスキーウェア。たった一日のために買う散財もできず、その人があちこちから探してくれることとなった。付き添いとなる私の分もだ。



明日の決戦を目前にし、ゲレンデをバックに一人作戦を練るガテラ。
果たして勝算はあるのか？
ここまで来たらやるしかない！
男はつべこべ考えず勝負するのだ。
とても思っているであろう。

そして当日。オニコウベという宮城県のスキー場。新幹線を降り、駅周辺には少しの雪。しかしバスが進むにつれどんどん雪が深くなっていくのであります。その様子に不安を隠しつつ、ビデオを回しまくるガテラ。

ホテルにはスキー客だらけ。早速今回招待をしてくれたTさんを探す。が、何しろ主催者なので忙しい忙しい。そんな中、手を煩わせてしまうのも申し訳なく、とにかく部屋に案内してもらい、スキーウェアを受け取りました。

夕食。先に来ていた人たちと一緒に食事。彼らは今日一

日講習を受けた後なので、皆さんすでに仲良しになっている。そんな彼らにあとから来た私たちを紹介してくれ、宴は進む。

夜。ガテラはグレンデの見える場所にたたずみ、一面の雪を見て怖気つくものの、好奇心は隠しきれない。久々に子供の様にほころんだ顔を見たのだ。

当日。生まれて初めてスキーウェアを着てみるが、何とも優れものですね。寒くない。その分余計に太って見えるのは仕方ない。

そしてついにチェアスキーに乗ってみる。サポートの人に抱えられながらスキーの椅子に収まるガテラ、とにかく倒れるのが怖いようで、きちんと支えろとか、そのくせ写真を撮れとかうるさいのであります。

準備も終わり、記念撮影をしてから、いざ出陣！

うしろを押してもらいながら、グレンデに出るけど、体は椅子に固定されているし、両手には固定されたストックを持っている。すべてが固定されている状況が、どうやら怖いらしい。転んだときに咄嗟に手を付けないこと、体を抜けないこと、それが不安のようです。でもさ、ほら。あんなに小さい女の子だって滑っている。だから大丈夫だよ、と無責任な言葉をかけ、引っ張られ斜面を登っていく。さて、行きますか。

おお～っ！結構バランス取れているではないの。ほんの数メートルの距離だけど、最後にちょこっと転んだだけで滑ることができました。しかしやはり転ぶ体勢がうまく取れないようすな。転ぶときに自分の手を下につけないことに不満たらたら。2本目の滑走も途中まではうまく滑れるのだけど、どうしても最後転んでしまう。

が、ですね、ここで変に体をぐねってしまったのです。

実はガテラ、数週間前から鎖骨の関節を痛めている。日本にいた間は時間があるとジムに通い、筋トレをし、その結果やりすぎて関節が炎症してしまっていたのです。だからしばらくスポーツを控えろと言われていたところだったので。でも楽しみにしていたチェアスキー、痛みを押し殺してチャレンジしたのであります。



見づらくかもしれないが、チェアスキーに乗っているガテラ。なかなかかっこよかったが、実際はかなりの寒さに震えておりました。

でももうダメ…。どうにも痛くて手が上がらなくなっちゃった。でもせっかく来たのだから、もう少し挑戦したいということで、バイスキーというのに乗り換える。これは板が2本ついていて、より安定している。この後ろを支えてもらって、滑り降りようという魂胆。

今度は転ぶ心配がありません。スノーモービルに引っ張られ、もっとグレンデの上の方まで連れて行ってもらい、滑り降りました。そんなことを何本かこなしているうちにあたりは吹雪。吹雪いているったら吹雪いている。

さすがに続けることは困難と主催者は判断し、講習はこれまで。いや～、寒かったけど楽しかった。肝心のガテラはひどく鎖骨が痛いのか、少々ぐったり。

しかしですねえ、これはきっとアフリカ大陸初のチェアスキーヤーの誕生ですよ。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【理不尽。】

ルワンダのパスポートで旅行をすると、不便なことがたくさんある。例えば今回の日本行き。アジア経由で行く予定が、旅行会社の手違いで航空券が取れなかった。だからヨーロッパ経由で行くことになった。

行きはルワンダーケニア→フランス→日本。帰りは日本→フランス→オランダ→ルワンダというコース。しかし日本へ向かう途中ケニアの空港で言われた。「帰りはフランス・オランダの2か国を経由するから、シェンゲン・ビザ（ヨーロッパを回るためのビザ）が必要になりますよ。」

さて困った。そんなこと知らなかったぞ。トランジットで空港の外に出るわけではないから、そんなものは必要ないと思っていた。日本に着いてからそのビザを取るだけの時間のゆとりもないぞ。

同じ目的地に行く真美は、一切の条件もなく、すんなり行けるというのに、この差は何だ？

そうなのです。先進国と言われていない国のパスポートを持って歩くということは、こういうことなのです。世の中は決して平等にできてはいないのです。

以前オランダを経由し、フランスに行こうとした時。先に並んだ真美はそのままパスポートにハンコを押された。でも俺の番になると「どこへ行くんだ？招待状はあるのか？現金はいくら持っている？クレジットカードはあるのか？」など嫌味としか思えないような質問を矢継ぎ早にされた。が、伊達にアフリカで生きてきたわけじゃない。こんな嫌味は日常茶飯事だ。先進国の奴らよ、せいぜい吠えてなさい。

そして真美を見ると、まなじり吊り上げて怒りをあらわにしている。まるで自分が言われているかのように係官に喰ってかかる。ほんとに理不尽ですね、世の中って。同じようにこの世に生まれたにも関わらず、生まれた場所によって扱いが違って来る。

ふふふ。俺たちを舐めるなよ。生まれた時からありとあらゆる理不尽と向かい合い、それと戦うためについた生きる力。それを俺たちは持ち合わせている。だからちょっとやさっとのことでは動じないのです。

先進国の人たち、きっと世界は自分たちが牛耳っていると思っているだろうけど、最後に生き残るのは俺たちだけ。その時に泣きついて遅いのだ。君たちも一度、俺たちと同じような理不尽を感じてみなされ。そうすれば俺たちの気持ちがわかるから。

ああ、忙しいったら忙しい。東京パラリンピックの次は北京の冬季パラリンピックか。などと騒ぎながら、スキー場をあとにしたのであります。

招待してくださったＴさん、そして私たちを温かく迎えてくれた参加者の皆さん、本当にありがとうございました。滑って転んだガテラですが、とても楽しかったです。またこういう機会があったら参加してみたいな。私たちのチャレンジはこれからも続くのである。

【2017年はいろいろ賞をいただいたよ。】

前号で外務大臣表彰を受けたということをお伝えしましたが、さらにまた賞をいただきました。地球倫理研究所というところが地球倫理の推進に貢献している団体に対して贈っている地球倫理推進賞。今回国際部門の団体としてワンラブがいただきました。また国内部門は「どんぐり1000年の森を作る会」。

授賞式が行われる3月はすでに私たち、ルワンダに戻ってしまっている。再度日本に来るための渡航費を出すゆとりがない…。というわけで無理にお願いをして、ガテラと私の航空券まで負担していただきました。

こういう日はうれしいものです。自分にスポットライトが当たるのは、恥ずかしいけどうれしいです。

実は私、父親が亡くなってから、父方の家族とあまりうまくいっていませんでした。でもこの間帰国した時に、駅でばったり叔母と会い、叔母がガテラのことを抱きしめてくれました。自分たちの不義理によって関係を悪くしてしまったので、そのハグは何よりもうれしく、今回の表彰式にも叔母夫婦を招待しました。だってこの叔母夫婦は私が小さい頃、あのサザンの楽曲でもあるホテルパシフィックにも連れて行ってきて、本当は私も大好きな人たちなのですから。

前日はどんぐり1000年の人たちと、倫理研究所の人と一緒に食事。自分の知らない分野の人と話ができるのは楽しいよ。気がついたら遅い時間になっていました。でも今日は大丈夫。会場となるホテルに部屋をとってくれたのです。

当日の午前中に少しリハーサル。時間に厳しい日本人は分単位で式典が進みます。ルワンダに移り、時間の観念が少しずれてしまった私は、細かく過ぎていく時間の流れに少々戸惑うのであります。

式典にはワンラブのボランティア、サポーター、数年前にルワンダに来てくれた小学校の先生と子供たち（今はもう高校生になりました）、そして叔父叔母とその息子夫婦など、近しい人が来てくれました。

今回のこの賞を受けると、同時に文部科学大臣賞もいただけるというグリコの賞。2017年は国からの賞に縁があった年となりました。

授賞式の後にはワンラブのことを話す時間も40分ほどあり、スライドを使って今までの歩みと義足を作っている様子などをお話ししました。そしてその時にガテラの「目指せ！2020年のパラリンピック」話をしたら、会場か

ら拍手をもらいました。よ～し、これでまたサポーターが増えたぞ。

たくさんの人に支えられながら続けてこられたワンラブ。賞をもらって益々パワーアップするのであります。皆さん、本当にありがとう。

授賞式が終わり、夜は叔父叔母、その息子夫婦と何年かぶりにガテラも交え居酒屋に行きました。10年続いたわだかまりも、なかったかの如く時間を過ごすことができ、改めて家族のありがたみを感じた次第です。



2017年はいろいろな賞をいただくことができました。皆さまのおかげです。ありがとうございました。これからもがんばりますぞ～！盾と文部科学大臣からの表彰状を手にして、うれしいガテラと私。

最近ストレスも多く、眠れない日が多かったけど、家族が元に戻った安心感から、ぐっすり眠れそうという予感の元、家路につきました。

＊結論的にはうれしさのあまり興奮しすぎて、結局眠れなかったのであります…。とほほ…。

【雨音が怖い…。】

資金集めの帰国からルワンダに戻り、いつものように義足を作っています。平和な日々を望みますが、そう簡単にはいかないのが人生。

日本からのスタディツアーの人を案内している途中で雨が降り出したが、無事に一日が終わりワンラブへ戻る。

が、大雨のためワンラブランド内の川の水位が氾濫寸前のところまで来ている。まんじりともせず夜を過ごし、明け方、ガテラの元にセキュリティから電話が入る。「あの大雨で川の橋が落ちた…」

ワンラブランドには川が流れており、中に入るにはその橋を渡らないといけなないのであります。ああ、今日はルワンダの車のディーラーがワンラブに車両を寄贈してくれるめでたい日（そうなのです。ワンラブの活動に対して車を扱っている会社が、ピックアップトラックを寄付してくれたのです！）。だからその式典に行かなくちゃいけないのだ。しかし橋を渡らないことにはワンラブの外に出られない！会場まで乗って行く車も敷地の中だ。

どうしてこうなのでしょうね…。外部から車を借りて、その車で式典会場まで行くしかない、そう思ったのもつかの間、落ちたのは橋の右半分。つまり左部分はまだ生きているのです。それを見てガテラは強行突破を決意。いや、待て。そんな無謀なことをして、橋に乗った瞬間残った部分も落っこちてしまったら、車もろとも川の中ではないか！必死に止めるが、こうと決めたら誰もガテラを止められない。止められないいたら止められない。

しかし！固唾を飲む中、男ガテラはやりました。車に残った半分の橋を渡り、無事に陸の孤島となってしまったワ

ンラブランドから脱出したのでした。

そしてその後数日をかけて橋も修理し、平常に戻るかと思いきや…。また大雨です。川の水位もぐんぐん上がってきました。雨のピークは越え、一安心と思ったら、何やら家の中で飼っている猫が慌て始めました。どこからかびちゃびちゃと水音もしている。そうなのです。川が徐々に氾濫し始め、窓の隙間から泥水が入り込んできました。そしてそれはあっという間に家の中を流れる濁流となり、一面は泥水。床に直に置いてあるものを非難させ、雨が止むのを待ち、その晩は一晚中セキュリティを総動員させて、泥水をかき出したのでした。

そして翌日、泥だらけになった部屋や事務所、その他の場所を掃除し、一息ついたところ、また雨です…。しかも激しい雨。昨日の出来事がよみがえります。

川を見ると、昨日と同じようにどんどん水位が上がり始めた…。もうあと一息であられます。その状況を目の当たりにし、ルワンダに持ってきている仏壇に手を合わせる私。苦しい時の神頼みとはこのことです。どうかお父さん、助けてください。

しかし川はあられ始めました。それは一気に来るのではなく、少しずつ、少しずつ家の窓に近づいてきました。ピチャ、ピチャ。ついにまた部屋の中に入ってきました。こうなったらもうジタバタしても仕方ない。来るなら来い！と開き直って入り込む泥水をかき出し始めたら…。ああ、神さまはいるのですね。幸い、少し水が流れ込んだだけで、水位が下がってきました…。



洪水の翌日。
ポリタンクで水をかき出し中。
自然の前では人間なんてちっぽけなものです。
どうか、この先大雨が降りませんように。

ということが2日続き、さすがに精神的に疲れました。そして泥のかき出しで腰をやられました…。家の中の浸水は2日目はくい止められました。でも事務所は2日ともやられました。腰を曲げられない私はお掃除の女性に手伝ってもらいながら、泥水をかき出し、何とか仕事ができる状態まで復帰したのであります。が、ゲストハウスとして開放している部屋はまだ汚れたまま。そして川はものすごい勢いの水に川岸をえぐられてしまい、積み上げていた土嚢も無残に流れ、自然災害の恐ろしさを見せつけられました。

ワンラブランドは低地にあり、雨が降ると回りの雨水が一気に流れ込みます。しかもルワンダは最近どこもかしこも道路や土地を舗装してしまっているのので、雨水が土にしみこみません。だからそういう水がどっとワンラブに流れ込んでくるのです。この場所で活動をしている限りはこの災害が続きます…。そのたびに貴重なワンラブの資金が費やされてしまうのです。ルワンダ政府から無償で譲ってもらった土地ではあるものの、こう何度も続くと恨めしくな

ってきます。

だから最近、雨の音を聞くのが怖いのです。昔はトタン屋根にあたる雨音を聞くと、心休まったのですが、今は不安で心臓がドキドキしてしまうのです。どうぞ神さま、これ以上ワンラブが災害を受けないようにお助け下さい。

そんなふうにこれを書いている今、向こうの方で雷がゴロゴロと鳴っている。ああ、また雨が降るのだろうか？早く雨期が終わりますように。

【数字を増やしていくために。】

ルワンダ大虐殺が終わって、今年で24年になります。今年も各地で追悼集会が開かれました。

虐殺直後のルワンダ、日常は割と早く戻ってきたものの、物資も十分でなく、インフラも整っておらず、人々は復興に向けて努力をしてきました。その頃は街を歩いている人の服も破れていたり、靴を履いていなかったり、貧しさも目につきました。街中で牛を連れて歩いている人もたまに見かけました。それから24年。今ではそんな光景はキガリの街ではほぼ目にすることがありません。

今年も追悼集会に参加しました。集会の途中、泣き叫ぶ人も相変わらずいます。若い、虐殺の時代の記憶もないような人たちが、虐殺について歌っています。その地区で殺された人の名前を歌の中に盛り込みながら。ある人は虐殺のことを詩に表していました。

注目すべきはそこで話されたスピーチ。「ルワンダは虐殺終了から24年目を迎えました。来年で25年になります。そしてそれが50年、100年と続いていくルワンダを作ろうではないですか。」と静かに語る男性。それは私がいつか感じた思いと一緒だった。日本は戦争が終わり、戦後〇〇年という表現を使うことがある。その表現のなんと素晴らしいことか。そしてその言葉の重みを大切にしようとしないう今の政権。彼らはルワンダの人から学ぶべきだよ。



広島原爆ドームの前で。
原爆の被害を受けた人と、虐殺の被害を受けた人の気持ちは同じ。
事実を伝え、そこから学んでいこうという思い。

日本に滞在した時に広島に行き、初めて原爆ドームを訪問。そこで思った。つらいことを体験した人の思いは同じということ。その出来事を風化させたくないという思いだった。ルワンダは虐殺を知らない世代の人たちが、積極的にあの出来事に関わろうとしている。そしてそれを教えるのは体験してきた大人たち。私は父母から日本の戦争について聞けなかったことを後悔している。だから世の中の老人たち、うるさがられてもいいから、孫や若い人たちに戦争のことを伝えていってください。その言葉によってこれからの日本が作られていくのだから。



雑文もろもろ

広島義肢製作を教える大学の学生たちが、中古義足再生プロジェクトと称して、いらなくなった義足の材料を大量に集めてくれ、ワンラブに寄付してくれた。

集めている最中、それをどうやってルワンダまで運ぶかということが大きな課題だった。義足の材料は重たい。そしてルワンダは遠い。だから小包などで送るとかなりの輸送費となってしまうのだ。また普通の小包だと、途中で荷物がなくなってしまうたりすることもあるので、確実なのは配送の状況を確認できる国際宅急便だ。しかしこれだとおさら高くつく。大学での輸送費の援助にも限りがある。

ということで、今回自分たちが日本からルワンダに戻る時に、荷物として持って帰ることとした。それだと超過料金を払ったとしても、郵送するよりは安い。

成田には大学のT先生と奥さまが、それらをいくつかの段ボールに詰めて運んできてくれた。自分たちの荷物の重さを計り、大学から出る輸送費の予算を考えながら追加できる重さを計算し、成田空港のロビーで体重計に荷物を乗せながら持っていける量を検討する。

その甲斐あって、2度日本を往復したので、集めてくれた全部の材料をルワンダに持っていくことができました。

ルワンダの税関で「税金を払え」と言われるかもしれないので、これらの品物は寄付であるという手紙も一緒に用意したが、何のことはない。顔パスで荷物を何もチェックせず空港の外に出ることができた。

さてこれでまたルワンダの人たちに義足を作りますかな。97年に義肢製作所を開所した当時は、日曜であろうと患者さんたちが訪れ、日々義足作りに追われていた。今はそんなにたててこ舞いになることも減ったけど、義足を必要としている人がまだまだいるのも事実。義足を手に入れた人も、いつかはその義足は古くなり使えなくなる。だからやはりこうした義足の材料というのは必要なのです。

学生さんたちが集めてくれた義足の材料。ルワンダでずっと大活躍だよ。忙しい勉強の時間の合間に、せっせと集めてくれてありがとう。みんなのおかげでまた一人、ルワンダの障害者が義足を履くことができました。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信62号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（12～3月）

12月	円
1月	円
2月	円
3月	円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	13本
装具	4本
杖	860本

*但しこの杖は配布した数ではなく、製作した数です。皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【信用と疑惑】

いつも日本滞在中に何かが起こる。今回は盗難未遂だ。泥棒をしたのは外部の人間。しかし手引きをしたのは、なんとうちで雇っているセキュリティだったのだ…。

ルワンダにいて何が一番悲しいかという、信用していた人に裏切られることだ。もちろんこういうケースはどこの世界でもある。ルワンダに限ったことではない。

でも裏切られる頻度が、日本より圧倒的に多い。だから自ずと人を見る目が変わってくる。

どうせだったら相手を信用しながら仕事をしたい。でも信用しすぎると、どこかで自分が痛い目を見る羽目になる。過去何度もそういう形で裏切られた。

これはね、精神的にきついよ。人を見たら泥棒と思える生活というのは。人が近づいてきたら、つい「この人はいったい私の何を求めて近づいてくるのだ？」と思っちゃう。

だから私はルワンダに来て、性格が悪くなったと思っている。でもその場所の治安を守るべきセキュリティが、盗みを働くために手下を使って手引きをする。そりゃ、不信感も募るでしょうよ。

過去そんなふうにして、何度かセキュリティに物を盗まれた。そして盗みを働かなかったセキュリティは、盗んだセキュリティに容赦なく罰を与える。それはいわゆる暴力という形だ。

しかしいくら罪を犯したとはいえ、目の前で人が殴られている様子を見るのは、とても嫌なことだ。泣き叫んで赦しを乞うが、それでも殴る。いたたまれなくなって止める。

ああ、お願いだから信用の元、一緒に仕事をしようよ。疑いながら仕事をするのは嫌だよ。

今回の盗難未遂事件、今もそのセキュリティと手下は留置所に入っている。でも釈放されても、また仕事に戻すのは無理だろうな。どうやら今回が初めてというわけではないようだし…。いつの間にかなくなってしまった車のスベアタイヤ。きっと今回と同じ手口で盗んだのだろうな。

せめて留置所で頭をしっかりと冷やし、同じ罪を犯さないよう更生してほしいものである。

ルワンダではいつも信用と疑惑のはざまに立たされるのだ。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信63号 2018年5月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

